

演奏者

Violin

♪ 赤塚 牧太郎
石田 理紗
岡 寛子
小川 智子
木村 健太郎
行田 智昭
佐藤 麻美
佐藤 直
鈴木 佳奈
田中 拓歩
○長ヶ原 初香
常松 浩一郎
手島 奏平
寺沢 優奈
西江 勇樹
藤田 亮
堀内 堅裕
矢口 有花
藪田 明日香
山口 涼
山田 恵
○山本 百合子

Viola

阿萬 美江
○潮見 渚
塩野 智子
柴田 早織
○相馬 亜紀子
寺田 亜里紗
西岡 崇
堀内 美穂
矢吹 匡
Cello
海野 優香
酒井 弘輔
須見 真樹子
松浦 明子
松屋 雄一郎
○矢吹 克宏
山口 祥子
Contrabass
石垣 夏穂
小林 正基
○藤田 顕次
宮崎 達哉
○安井 珠里亜

Flute

小澤 恵
久住 俊一

Oboe

高橋 圭子
野村 明日香

Clarinet

石井 絵美
塚本 安沙子

Fagott

高宮 雄太郎
山家 圭氏

Horn

荒川 夕貴
糸山 隆元

戸花 優希

長井 海雄

Trumpet

シゲ アシヤンカラ・アサユ
田中 匠

Trombone

秋本 大士
長岡 聡美

矢野 貴宏

Tuba

大久保 一樹

Percussion

庄司 朋生
白江 美樹
菅沼 さくら
菅 真維子
廣藤 由衣

♪…コンサートマスター

○…首席奏者

EnsembleWits 10th Anniversary Concert

2011年10月10日(月)祝

三鷹市芸術文化センター・風のホール

13:30開場 14:00開演

運営

団長:尾崎 洋

編成人事:木村 健太郎

スケジュールプランナー:小林 正基

会計:海野 優香、小澤 恵、久住 俊一

インスペクター:石井 絵美

定演マネージャ:田中 匠、高宮 雄太郎

チケット管理:鈴木 佳奈

広報:岡 寛子、須見 真樹子、松浦 明子、山口 祥子



Ensemble Wits 第10回定期演奏会

指揮:尾崎 洋

ビゼー作曲・シCHEDリン編曲

カルメン組曲

—休憩(20分)—

ドヴォルザーク作曲

交響曲第9番「新世界より」



今回の演目は、どちらの曲も一度は耳にしたことがある曲だと思います。前半に演奏するのは、有名なビゼーのカルメンをシCHEDリンという作曲家がアレンジをしたものです。彼の編曲によって、慣れ親しんだはずのメロディーが、良い意味で聴衆を楽しく裏切ってくれる、予想外な曲となっています。後半に演奏する「新世界」は、よく演奏されるがゆえに、ありきたりな演奏になりがちですが、「これは凄い」と感じられる強い意志と魂のある新世界を作り上げたいと思います。



団長ごあいさつ



結成してから10年が経ちます。

とにかく何か楽しいアンサンブルがやりたいと思って、何もわからず手探りでホールを借り、そこからすべてが始まりました。今までにいろいろな出会いや別れがあり、すべてが良き経験となり音楽だけではない糧になっています。

団長として、ずっと、いい楽団にするにはどうしたらいいかをいつも考えてきましたが、最近は、皆が楽しい楽団というのはどういうものか、を考えるようになりました。

「聴く人も、仲間の演奏家も、関係する皆が楽しく過ごせる日常。」

これを実現すること、実感できることが皆の望みであり、また、自分の楽しみだと感じています。

また指揮者として、いつも冷静で、経験に裏付けされた自信を持ち、計算された棒と演技によって、相手へ感情と表現を伝えられるナビゲーターでありたいと思っています。

10年前、今の楽団の姿をイメージすることはできませんでした。10年後の楽団の姿も想像することはできませんが、現実の積み重ねが10年後になると信じて、ひとつひとつ続けていきたいと思っています。

Ensemble Wits団長 尾崎 洋

曲紹介

ビゼー作曲 シCHEDリン編曲：カルメン組曲

Carmen -suite G.Bizet - R.Shchedrin

演奏時間：約40分

本演奏会の前半を飾るのは、ロシアの作曲家シCHEDリンが、ビゼーのオペラ「カルメン」から曲を抜粋し、弦楽器と打楽器のために編曲した「カルメン組曲」である。この組曲は、シCHEDリンの妻であるプリセツカヤという有名なバレリーナの依頼で作曲されたものであり、カルメンのストーリーよりは踊りを重視した曲の編成となっている。(実際のバレエはWeb上でも視聴可能であり、現代的な表現が興味深い作品となっているので、もしご興味があれば参照されたい。)

カルメンのストーリーについては、ご存じの方も多いのではないだろうか。カルメンは、タバコ工場で働く美しい女性。休憩時間はタバコの煙をたゆませ、怪しい魅力で男性を誘惑する。そんなカルメンが一目惚れしたのが、竜騎兵(今でいう警察官みたいな職業。本来であれば、犯罪のにおいがするカルメンを取り締まる側である。)の美男子のドン・ホセ。ホセもカルメンの魅力に取りつかれ、途中からは、半ばカルメンに引きずられる形で盗賊をするようになる。しかし、カルメンの心は、ホセの激しい嫉妬により、次第にホセから離れていき、闘牛士(竜騎兵とは反対の派手な職業)のエスカミーリョにくら替えしてしまう。嫉妬の鬼となったホセは、カルメンとの激しい言い争いの末、持っていた(!)ナイフでカルメンを刺し殺し、ここに舞台の幕は閉じる。

ビゼーによるオペラ、組曲は、ともによく演奏されており、中でも、カルメンがホセを誘惑する「ハバネラ」や、闘牛場の様子を描いた「闘牛士の行進」は有名である。今回演奏するシCHEDリン編曲は、演奏頻度こそ少ないものの、個性的な作品に仕上がっている。「カルメンにはこんな曲もあったんだ!」という驚きを楽しむことができる。

さて、この曲でカギとなるのが多数の打楽器だ。ともすれば退屈になってしまいそうな編成だが、そこはさすがシCHEDリンというべきか、打楽器の無限の可能性を上手く引き出してまとめている。この曲では実に20種以上の打楽器を奏者5人で演奏する。この曲で使われている打楽器の名前と特徴を紹介するので、どの打楽器がどこでどんな風に使われているのか確かめてみて欲しい。



音程が指定されている打楽器：

- ・マリンバ(木琴)
- ・チューブラベル(教会などにある鐘を演奏会用にしたもの)
- ・グロッケンシュピール(鉄琴)
- ・ヴィヴラフォン(鉄琴のより低音域を担当し、かつ響きを大きくしたもの)
- ・小太鼓(通常音程はないがこの組曲では音程が指定されている)
- ・トムトム(ドラムセットに入っている小太鼓より小さい太鼓)
- ・ボンゴ(片面太鼓をつなぎ合わせたもの)
- ・木魚(お寺でお坊さんが叩く)
- ・ティンパニ

音程が指定されていない打楽器：

- ・カスタネット
- ・カウベル(牛に付ける鐘)
- ・大太鼓
- ・タンバリン
- ・ギロ(中をくりぬいたヒョウタンの外側に刻みを入れ、棒でこすって音を出す)
- ・マラカス(シャカシャカ振るアレ)
- ・トライアングル
- ・ウッドブロック(くりぬいた木をスティックで叩く)
- ・クラベス(2つの木片を打ち合わせて音を出す)
- ・アンティックシンバル(小さいシンバルを2つ打ち合わせて音を出す)
- ・ムチ(実際のムチではなく木を打ち合わせることでムチに似た音を出す)
- ・カバサ(柄の付いた、手に乗せられるほどの大きさの、周りに溝を付けた中空の球形または円柱形の本体の回りに、小さな玉をひもでつなげて緩く巻き付けたもの)
- ・タムタム(天下一舞踏会で叩くようなドラ)
- ・ハイハットシンバル(13-14cmの2つのシンバルを打ち合わせる)

原曲通り情熱的な、それでいてどこか普通じゃないマニアクカルメン。どうぞご堪能あれ。

曲紹介

ドヴォルザーク作曲 交響曲第9番『新世界より』

Symphony No.9 From the New World Antonín Dvořák

演奏時間：約40分

「誘われて来てみたけれど、オケなんて初めて。」
そんなお客様にこの曲の楽しみ方の一例をご紹介します。

まずは副題「From the New World (=新世界より)」にご注目。生粋のチェコっ子ドヴォルザークは50代になってニューヨークから音楽院院長職の就任依頼を受け、初めて渡米する。「新世界」とはアメリカのことなのだ。ここで想像してみたい。既に地元で栄誉をほしいままにしている中年おじさんが、見知らぬ大地に折り紙付きの上陸・・・胃に穴が空きそうである。しかも今から119年も前のこと。大西洋を渡る道のりは長く感じられたに違いない。そんなアウェーの新世界アメリカから故郷チェコを想い描かれたのがこの曲である。皆様の眼裏に映る故郷のイメージと重ね合わせて耳を傾けて頂きたい。

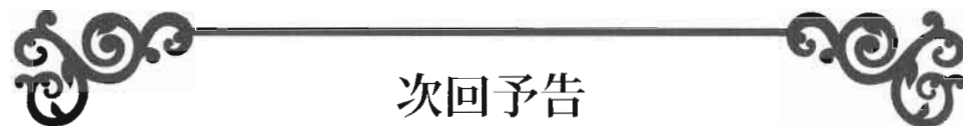
第一楽章 この先を予兆するような序奏を、つんざくような低弦とティンパニが場面転換させる。ホルンの分散和音と、それに応答する木管楽器のリズムのモチーフは、この先様々形を変えていくので意識するとお楽しみ頂けるかもしれない(第一主題)。続いてフルートが物哀しさを秘めた旋律を奏で、楽器を変えて広がっていく(第二主題)。金管によるファンファーレの後、決然とした大音量のtutti(全奏)にて幕を閉じる。

第二楽章 誰もが耳にした事がある「遠き山に日は落ちて」のメロディーである。条件反射でおうちに帰りたくなる方もいるかもしれない。多くの自治体が夕方を知らせる地域放送にこのメロディーを採用しているからだ。がっかりさせるようだが、ドヴォルザークはこのメロディーで夕暮れではなく、「アメリカの大草原の動物たちの朝早い目覚め」を表現したらしい。美しいソロを演奏するのはイングリッシュ・ホルン。オーボエよりも一回り大きな味わい深い音色の木管楽器である。終盤の弦楽器によるアンサンブル、ラストのコントラバスによる微かな音色にもご注目頂きたい。

第三楽章 これまでの雰囲気は一変、牧歌的なスケルツォである。緊張感漂う描写と、土の香りが漂う民謡風が交互に登場する。

第四楽章 ドヴォルザークは、元祖鉄道オタク。第四楽章の冒頭は、蒸気を吹き上げ加速度をつけるSLさながらである。全曲中、たった一回鳴るシンバルは、SLがブレーキをかけて連結する音との説があるが、皆様にはどう聞こえるだろうか？直後から奏でられるクラリネットの旋律で雰囲気はがらりと変化し、未来へ向かう正のエネルギーを予感頂けることだろう。その後、Witsメンバーこだわりの表現により、クライマックスに向かっていく。

私たちは、それぞれが全力で仕事・学業に取り組み、音楽活動と両立させている。メンバーには社長もいれば、入社したてで「ゆとり世代」とか揶揄されながらも必死の者までいる。そんな私たちにとって、「新世界」は、立ち向かわねばならない現実だったり将来だったりするかもしれない。しかし私たちは「新世界」に真摯に向かうことに、決して悲観的ではない。まだまだ青臭い今のWitsにしか演奏できない、明日への希望の光射すドヴォルザークを皆様にお届けしたいと思う。



次回予告

Ensemble Wits 第11回定期演奏会

チャイコフスキー 交響曲第4番 他

2012年10月上旬

みなさまのご来場を心よりお待ちしております。



Ensemble Witsでは現在、団員を募集しております。

是非一緒に演奏しませんか？

現在特に、バイオリン、ピオラ、コントラバス、ファゴット、ホルンのメンバーを募集中です。

オーケストラ、アンサンブル等、色々な音楽を楽しむことができます。見学だけでも歓迎いたします。お問い合わせお待ちしております。

詳しくは、Ensemble Witsの公式サイトをご覧ください。

